

天領祭と黒島地区とのつながり

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/23891 |

8. 天領祭と黒島地区とのつながり

福田 あい

1. はじめに
2. 天領祭の概要
3. 時代とともに、天領祭
4. 考察
5. おわりに

1. はじめに

黒島という地域は、住民の方たちが住んでいるところから道路一つ隔ててすぐ側に海があり、波の音と共に穏やかな時間が流れる静かな町である。

ここで調査実習を進める中で、私の印象に強く残ったものが黒島の住民が「天領祭」という祭りに関して話すときの目の輝きであった。天領祭のことをとても楽しそうに話してくれる人の話を聞いていると、天領祭の思い出は昔のよき思い出であるように感じられた。しかし、その「天領祭」が現在、少子高齢化の影響で様々に変化し、将来に関して明るい眺望がみえない（開催し続けることが困難である）という現実を聞き取り調査で知った私は、こんなにも黒島の住民が楽しみにしている祭りがなくなってしまうのはあまりにも悲しいことだと強く感じ、同時に、天領祭に対する興味がわいてきた。

2007年3月に発生した能登半島地震によってその年の天領祭は開催を見送られたが、翌年調査実習が行われた2008年には天領祭を楽しみにしている黒島の住民達の手によって、天領祭が行われた。残念ながら、私は見学することができなかったが、黒島の人から聞いたこの祭りについて深く知りたいと思い、調査に協力していただいた方のお話と、提供していただいた天領祭の様子が記録されたビデオなどからこの報告書を作成した。実際の祭りを見ていないため、臨場感に欠ける部分はあるかと思うが、ビデオやお話をから感じたこと、そして聞き取りから見てきた「天領祭」と黒島の人びととの深いつながりを通して、黒島住民にとっての天領祭の位置づけ、今後

の天領祭がどうなっていくかについて考えていきたいと思う。

2. 天領祭の概要

2.1 天領祭の概要

『南町曳山小史』によると、黒島は、古くから船乗りの町であった。番匠屋善右衛門が廻船業を始め、その後、森岡屋又四郎・浜岡屋弥三兵衛・中屋藤五郎といった船乗りたちが勢威をふるい、元龜～天正（1570～1591年）の頃から明治中期（1887年）までの約300年間、黒島は北前船業によって栄えた。また、貞享元（1684）年に徳川幕府直轄地（天領）となり、日本海鎮護の神として若宮八幡神社に、丸に立葵の御紋が贈られた。天領祭に使われる道具の御紋には全てこの丸に立葵が用いられている。

天領祭の起源ははっきりとはわかっていない。祭りで使用する神輿や2頭の獅子面は番匠屋善右衛門によって寄進されたもので、若宮八幡神社の造営も番匠屋によるものである。そして享保年間（1716年）より祭りで奴振行列が行われるようになり、文化（1804年）になると、鍋屋甚兵衛から舟型曳山が寄進された。こうして祭典様式が整ったのは、文化年間（1804～1817年）頃だと推測される。

また、Sさん（70歳代・男性）によると、昔この祭りは「黒島祇園祭」と呼ばれており、昭和30（1955）年ごろになって、釜口氏により「天領祭」と名づけられた。前の名称にもあるように京都の祇園祭を模したものであるという。また、天領祭は輪島市の無形民俗文化財に登録されている。

天領祭はお盆も過ぎた8月17・18日に行われる。天領祭は黒島の年間の祭りの中でも最も盛大に行われる祭りである。

以下では、平成17（2005）年度に製作された天領祭のビデオと『南町曳山小史』（以下『小史』）及び関係者への聞き取りを基に、天領祭の流れを概述している。また、祭りの出し物・組織についても大まかではあるが触れている。）

2.2 祭りの前

祭りは8月の初め、参加団体の責任者により大祭運営打ち合わせ会を行い、2日間の祭典運営順行時間を決めることから始まる。『小史』によると昭和40年（1965）頃まで8月15日、神社に氏子総代、北町・南町両曳山保存会が集まり各種役割を決めていたが、昭和42年頃から8月10日に決定することに変更になったという。現在では、祭りの準備として、8月13日頃に氏子総代・区長会・海員団役員や有志などが神社に集まり、倉庫から神輿を出して真鍮磨きや飾り付けを行

う。浜には神様を迎え入れるお仮屋（木造で全体に障子紙が貼られている）が設営されるが、これは祭りの前日である16日に黒島住民の手によって行われる。お仮屋の設営は北町と南町は1年交代で行い、担当しない方は二子山の御休場などで草を刈り、巡行する道を整備する。

また北町・南町両曳山保存会で曳山倉出し、曳山建てを行い、人形係は曳山飾り付けの人形を作る。具体的には、曳山の人形制作・お仮屋人形は顔や手足など様々なパーツを倉庫に保有していて、毎年組み合わせの異なった人形を2〜3日前ごろから製作している。現在は着物の着付けのみを行う。

各家では、家を飾りつけ神様を迎える準備をする。曳山が通る道沿いにある家は、玄関や曳山の通る道に面した部屋にお神酒や屏風、その家の宝物などを飾る。

2.3 祭り当日（8月17・18日）

天領祭は、多くの準備を終え、当日を迎える。

17日の朝10時ごろ、北前船資料館から北町の曳山が出され、神社で待機する。南町の曳山は午後2時ごろに資料館を出て神社に向かい、神社前の広場で北町の曳山と並び御立ちを待つ。午後2時30分、若宮八幡神社で祭典が行われる。祭典終了後、神輿に御分霊を遷御し、御幣・御神を曳山の正面に捧げて、2日間の無事運行の守護を祈る。

午後3時30分ごろになると、神社にあげれ獅子が到着する。そして獅子の「若宮八幡、御立ちや」というかけ声が神社に響き、それを合図に神輿は御立ちとなり、子ども奴振も出発する。祭りの始まりである。

神社前で行列は曳山と合流し、神輿の行列は、午後4時頃、本町・高見町・此花町へと巡行していく。神輿の後には子ども神輿・猿田彦・旗・般若面（河童）・供侍・奴振行列・天領太鼓・子どもお供・紙御幣・金御幣・弓・笛・刀・神輿・神職・氏子・巫女ら（時代によって若干異なる）が続く。その後、前山として北町の曳山が、後ろ山として南町の曳山が続く。行列には、「猿田彦」と呼ばれる天狗の面をつけた者がいるが、これは行列の総取締りであり、毎年1名が指名される。Nさん（60歳代・女性）によると定年退職した男性には1度はこの役割が回ってくるという。猿田彦の右にるのが河童という役割で、若浪会の会長がこの役をやることになっている。



写真1 左：猿田彦、右：河童

行列は1日目、北町を巡行し、神輿が北町の端にある二子山の御休場に到着すると、「北端祭」が営まれる。この間に、此花町広場では曳山が「山廻し」と呼ばれる方向転換をして、南町の曳山が前山、北町の曳山が後山となる。神輿は1時間ほど休憩した後、二子山を御立ちになり、再び北町を巡行して夕方、浜に設けられたお仮屋へ向かい、そこに納められる。そして、あばれ獅子の「若宮八幡、御休み」という声で1日目の巡行は終了となる。お仮屋では各種奉燈で灯を点し、昭和47(1967)年頃には曳山は装飾を解いて、飾り人形は人形御宿(南町、嘉門安太郎氏宅、北町、角海藤三氏宅)に移して飾り、夜になると人びとは人形を見物しながら浜に集まった。現在は、浜に到着しても人形は曳山に乗せたままである。

夜9時頃には、お仮屋で「夜の祭典」が行われる。祭典が終わると、天領太鼓が叩かれ、浜で盛大な盆踊りが行われる。黒島の人びとは夜も更けるのも忘れがちに踊りに熱狂する。しかしながら現在は、高齢化に伴い踊り手が減り、盆踊りは行われていない。

2日目は、午前9時頃から浜で朝の祭典が始まり、それが終わるころ、南町の曳山は港町・中町・浜町・松原両町を巡行し南端に行く。これを「朝山」という。昔は両曳山が同じ時間に南端に向かっていたが3~4年前から北町の曳山は遅れて行くようになった。

神輿は午後2時頃、あばれ獅子の声と共に再び御立ちとなり、お仮屋小路から今度は南町を巡行(港町・中町・浜町・松原両町の順)する。昭和45(1965)年までは海岸道路を巡行し、昭和34年以前は、海岸浜を御練り巡行していたが交通量が増えたため町内巡行にすることになった。

午後5時頃、南町の端にある広場までくると小休憩し「南端祭」が営まれ、曳山も山廻しをする。神輿は獅子の合図で御立ちし北町・南町両曳山の待つ前を通り、浜町・松原両町・中町・港町・本町を巡行し曳山は北町を先頭に、これに続く。

若宮八幡神社に到着すると、着幸祭を行う。あばれ獅子が「一年一年お納めや」「若宮八幡御お休み」といい、引払いである。南町曳山は神社前広場で山廻しを行い北山の曳山と曳別れを行い、本町・中町・浜町・松原両町・高見町・此花町を経て倉庫に格納し祭りは千秋楽を迎える。

2.4 祭り終了後

・粕こみ

19日午前9時頃より、全役員連番(曳山保存会事務所)に集まって祭典費用の集金・支払いを行い決算を完了することであり、また、かつてはその晩に関係者を招待して反省会を兼ねた小宴がもたれた。これは、昔17・18日の両日、飲んだ酒の粕をさらにもみこんでそれで反省会を行ったという言い伝えによるものであるといわれている。20年ほど前から粕こみの宴は行われていないという。

・盆踊り

天領祭の前後16日～20日（最盛期には13日～20日）には盆踊りが行われていた。17日のみ浜にやぐらが立てられ、そこで踊る。それ以外の日には現在の資料館前に作られた連番の前や、道が広いところで輪を作って踊ったという。19日の晩には仮装をして踊ることもあった。黒島には昔から独特の浴衣が存在（若浪浴衣）しており、男性の浴衣と女性の浴衣はそれぞれ異なる。男性は荒波に桜の花びら、女性の浴衣は縞模様に千鳥が描かれたデザインである。Hさん（70歳代・女性）によると、男性用はかなり昔から存在していたが、女性用は、女性たちが、盆踊りのときにこぞって浴衣の豪華さを競い合ったために、それを抑制するために作られたという。盆踊りは、踊る人がほとんどいなくなってしまうため、8～10年ほど前から行われなくなった。また、婦人会では民謡クラブをつくり、公民館で月に1度程度集まり踊っているという。



写真2 男性用の浴衣

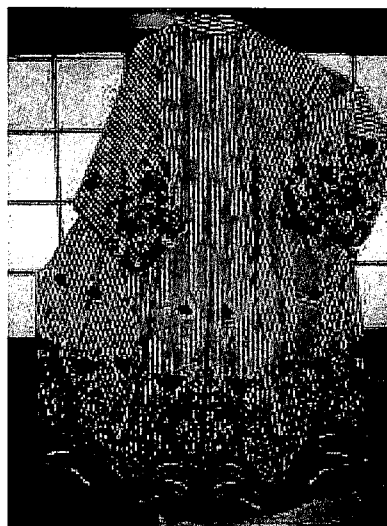


写真3 女性用の浴衣

祭りの様々な出し物・役割

・奴振

小学3・4年～中学1年生（尋常高等小学校1年生まで）の男子がこの役割を担当する。奴振とは、子どもたちが顔に独特の化粧をし、天領祭の行列の中で、歌を歌い、独特の足踏み（身体を大きく左右に揺らし左に身体を開いているときに右足を出し右に開いているときに左足を出すという歩き方）をしながら黒島の大通りを巡行する。奴振には、提灯・鉄砲・小しゃんが・鉄箱・槍・長刀・台笠・堅笠・大しゃんがという9種類の役割があり、子どもたちはそれぞれの道具を

右肩に背負う。また、奴振の人数・隊形はその年や時代背景によって異なる。

奴振では、鉄箱から後ろにいる子ども達が一人ずつ歌を歌っていく。比較的年少者の役割である提灯と鉄砲役は囃子のみを担当する。また、奴振行列の中心にいる旦那さまと呼ばれる役の子どもは歌を歌わない。

昔からの廻船問屋の家の前に来ると、特別な歌を歌うことになっており、この役割は鉄箱が担当する。そのため昔は、鉄箱は年長の歌の上手い子どもが指名されたという。また、代表的な歌として、1日目奴振が出発して最初に歌う歌「下へ下へと枯木を流す 流す枯木に花が咲く」、2日目神輿が浜を出発する際の「ひこよりぎばさきおんたち（おんねり）や」がある。2日目神社に着き、奴振を終えるときの「これで奴の振り納め」がある。「ひこよりぎばさきおんたち（おんねり）や」の「ひこよりぎばさき」の言葉の意味は黒島の人もよくわからないという。黒島のすぐ近くの海の浅瀬にある高島という岩を指しているのではないかという意見もあった。

奴振の衣装は、背中に立葵の紋があり、襟に模様の入った黒半天である。また、腰に瓢箪や印籠をぶら下げ、足には白い脚絆に白足袋でわらじを履き、頭には陣笠を被る。奴振りの役割によって化粧や衣装は異なり、化粧は女性ではなく、技術を持った男性が行う。また、奴振の衣装は北町・南町でも異なり、旦那さまの袴も違うという。現在は比較的新しい南町の衣装を使用している。



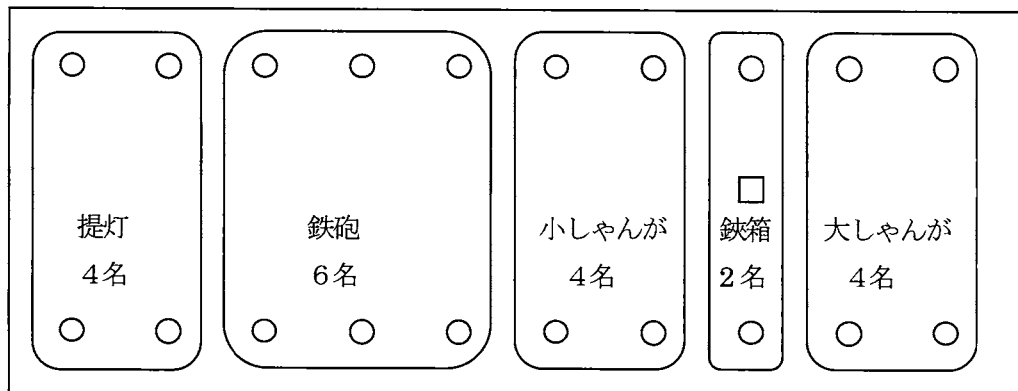
写真4 提灯



写真5 旦那さま

図1 奴振の隊形 (Sさん (70歳代・男性) の時代のかたち (戦時中))

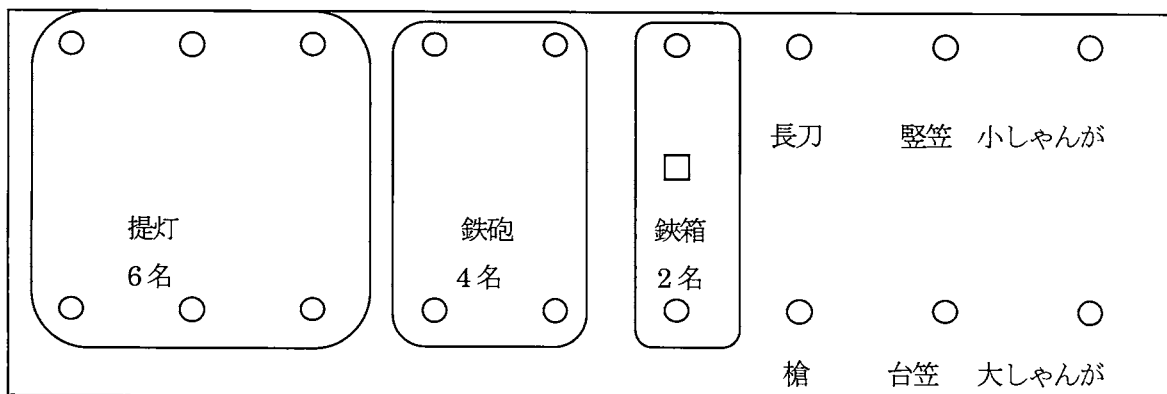
進行方向 ←



計 23 名 (□→旦那さま 1 名)

図2 奴振の隊形 (現在のかたち (Kさん (70歳代・男性) より))

進行方向 ←



計 19 名 (□→旦那さま 1 名)

奴振の練習は夏休みの頃、8月に入った頃に始められた。奴振の指導・監督は尋常高等小学校2年生が行っていた。練習は厳しいもので、お話を聞いたKさん(70歳代・男性)は、歩き方が上手くできなくて上級生に棒で叩かれたこともあったという。昔は、子どもがたくさんいたため、子ども全員が奴振をやれるわけではなかった。奴振の歩き方や歌が上手くできない子や練習を怠けている子は、上級生から叱られ奴振ができなくなってしまったという。奴振ができない子どもは供侍や曳山を引く役をした。

また、近年は少子化の影響で女子も参加可能である。7~9年ほど前から黒島の人間で奴振をす

ることが難しくなり、奴振が出せない状態が続いた。都市部からの臨海学校参加生徒や金沢の劇団の生徒を呼び奴振に出してもらった年もあったが、経費などの関係でどちらも1度きりの試行となった。5～6年ほど前からは門前西小学校の子どもにも出してもらい、昔は22人ほどで行っていた奴振も現在では18人ほどで行列をつくっている。現在黒島には、奴振をする年代の子どもが北町・南町合わせて2～3人ほどしかいない。

奴振は曳山保存会に所属する出し物であるが、現在は奴振委員会が管理する。奴振は北町・南町で1年交代で担当するものだが、2～3年前から北町・南町合同で出しKさんを中心に運営している。奴振委員会は元々あったものではなく、少子化の影響で維持が難しくなってきた奴振の運営を支えるために自然に組織されたものである。

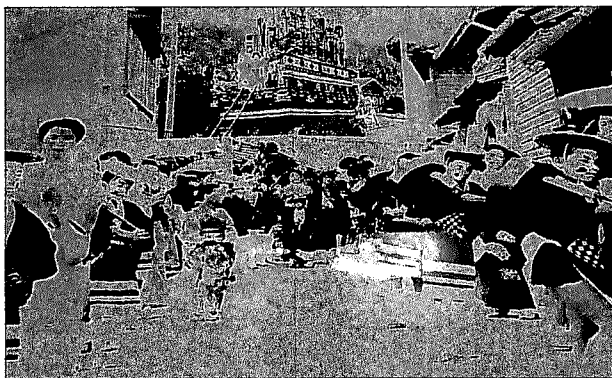


写真6 奴振行列の様子

・扇ぎ手

子ども奴振では、行列をなしている子どもたちをそれぞれの親がうちわで扇ぐ。その際の服装は着物で、母親たちは着物や美しく結い上げられた日本髪 of 豪華さ・美しさを競ったという。女性にとっての天領祭は、自分を美しく着飾り、他の女性と競いあう場であり、より派手にすることに夢中になっていたという。現在は、奴振のほとんどが門前西小学校の生徒なので、女性たちは、自分の子どもとは関係なく子どもたちをあおいでいる。

・神輿

天領祭に使用される神輿は享保時代（1716年～1735年）に製作されたもので、番匠屋善右衛門の寄進によって寄進された。神輿は100貫（約370キロ）ほどある立派なもので以前は巡行は全て担いで行われていたが、今では担ぎ手が不足しているため20年ほど前から若宮八幡神社の前の急な階段、1日目の御休場である二子山の道など以外の巡行路は神輿を台車に乗せて運んでいる。

Sさんによると以前は、神輿はよその地域から、婿などで来た男性が黒島の神輿を担ぐ役目であったという。また、他の地域から男たちを雇い、担がせたこともあったらしい。これは、黒島の神輿はよそ者に担がせるという考えがもとにあったということである。

神輿は傷みが酷くなってきており、能登半島地震でも被害を受けたため、全面修復の話が出ている。しかし、豪華な造りであることから、修復費用には200～400万円必要であり、まだ実行には至っていない。

また、子ども神輿（樽神輿）は戦後にできたものであり、曳山や奴振に参加できない女の子のためにつくられた出し物である。

・あばれ獅子

あばれ獅子は南町だけが毎年担当する出し物で中学2年以上の男子が担当するものである。近年は、少子化の影響や飲酒をすることもあるので成人以上がやることとなっている。南町の出し物になった由来は、昔黒島の廻船業を始めた番匠屋善右衛門が船の若い衆に獅子面と蚊帳を購入し、獅子に扮装させたところからきているという説があるが、諸説あり確かではない。あばれ獅子は曳山を邪魔するものから曳山を守る露払いの役割を担っている。獅子には大小あり（大獅子・小獅子）、大きいものが小さいものを引き連れる。獅子は暴れるものなので猿面をかぶった者があばれ獅子を手なづける。猿面は2つあり、それぞれ大獅子・小獅子を手なづける。あばれ獅子が神社に来ないと、神輿の御立ちができない。

あばれ獅子は威勢のいい若者たちが中に入りお酒も飲むため、昔は、人の家に勝手に上がりこむ、海に飛び込む、女性に抱きつくなどの問題も起こしていた。また、祭りは夏の炎天下の中行われるため、獅子が暑さで巡行の途中に道にへたり込んでしまうこともあったという。そうすると、住民たちが獅子の周りに集まり、団扇で扇いで前に進むよう促す。

現在のあばれ獅子は以前のほどの威勢の良さは失われてしまったといわれるが、昨年天領祭では、30～40才代の黒島の生まれのひと、手伝いとして金沢大学保健学科の男性があばれ獅子の役をした。

・旗持ち

以前は比較的貧しい家の女性の役割であったが、現在は男性も参加するようになった。昔は30人ほどの旗持ちがいたが、現在では6～8人程度である。

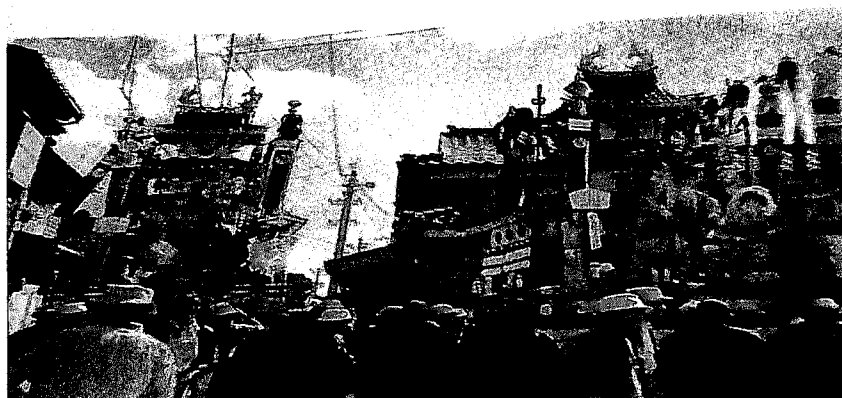
・曳山

曳山の由来は、文化の頃（1804年）鍋屋勘七の甚兵衛という人が境港で船型の曳山を購入し寄

付したものである。その後、嘉永に入り（1847年）、曳山を改造しようということになり、現在の型と同じ城の天守型の曳山が嘉永3（1850）年7月19日に完成した。南町においては浜岡屋弥三兵衛、中屋藤五郎、その本家浜中屋の全盛期の嘉永3年（1850年）城型曳山を17名で新造した。安政4年（1857）年に131名で再び曳山を改造し、金銀彩色を施し装飾を一新した。北町は名古屋城、南町は大阪城をモデルとしているといわれ、北町の曳山は天守閣が2つ、南町のもは3つある。また長さ8メートル以上あった曳山の方向を操る梶棒は、数年前まで北前船の帆桁が使われていた。

曳山の上には人が乗れるようになっており、天領祭のときは小さな子ども（男の子）が大人に乗せてもらう。また、曳山の中には「屋形」と呼ばれる空間があり、お囃子（太鼓・笛・シャギリ・鐘）を担当する人たちがそこで演奏する。

以前は若宮八幡神社の近くに北町の倉庫、黒島コミュニティセンターに続く道の途中に南町の倉庫が、それぞれの曳山は解体され納められていたが、南町が昭和45（1970）年9月に、北町も昭和46（1971）年8月に曳山を収納する新倉庫を新築し、曳山を組み立てた状態のまま保存できるようになったため、昭和46～47（1971～1972）年頃より曳山の解体や曳山建ては行わない事となった。また、倉庫が各町の端に設けられていたため管理が行き届かないなどの面から、現在は両曳山とも北町にある黒島天領北前船資料館で保存している。



29 黒島地区に伝わる伝統の「黒島天領祭」（輪島市指定無形文化財）

写真7 黒島の曳山（右：北町、左：南町）

○天領祭を支える組織

・曳山保存会

曳山の存続のために昭和3（1928）年、従来の北町若連中、南町若連中をそれぞれ北町曳山保存会、南町曳山保存会とした。役員は10人（理事9人・幹事1人）で構成される。祭りの1ヶ月ほ

ど前から本格的に始動し、祭り前に2~3回祭り後に1回理事会を開く。活動内容は主に曳山の維持と管理である。曳山に傷みがあった場合には、黒島の職人などにより修繕が行われる。

・若浪会

若浪会は昔は踊りの世話をする踊りの会であったが衰退し、一時はなくなってしまっていたが、20年ほど前に青年団によって再結成された。以前は15才~22才の人に会員資格があった。22歳の人の中から会長1人が選ばれ、会長は一生に一度、1年間しかできなかった。黒島に若者が減ったので、現在では1人で何年も会長をすることが多い。現在は20才代~30才代前半の若連中が所属する。また、会員のほとんどの若者が金沢などに出ていってしまっているため、若者が地元に戻ってきている天領祭の時期だけ結成されるようになっている。現会長も会長は名前だけで普段は金沢に住んでいる。Mさん(30才代・男性)によると獅子・奴振の世話やお仮屋の鳥居の設営が若浪会の仕事であるが、昨年の天領祭では、若浪会の人員が集まらず鳥居の設営は他の住民によって行われたという。

また、15年ほど前から天領会という組織が天領祭において様々な仕事を行っている。若浪会を卒業して無役となった40代後半~50代の人たちが若浪会にとって代わるものとして発足させたものであるが、組織としては正式には認められていない。

3. 時代とともに、天領祭

前項で、天領祭の流れ・組織などを大まかに述べたが、時代の流れと共に、黒島の状況は大きく変化し、天領祭も変化している。黒島では高齢化・過疎化が進み、全体の人口が大幅に減少してしまった。それに伴い、現在祭りの担い手が不足してしまっている。黒島の天領祭は、住民ひとりひとりにそれぞれ役割があり、皆の協力によって毎年の祭りが支えられている。よって、祭りの担い手とは黒島地域に住む人びと全員であるといえるのである。しかしながら、現在の黒島の状況で天領祭を行うことは難しく、今後天領祭をし続けるにも様々な工夫が必要となってきている。

ここで祭りが盛んであった昔と現在を比べて大きく変わったことをいくつか挙げたいと思う。まず、子どもが非常に少なくなってしまうため(現在では北町・南町合わせて2~3人程度)、5~6年ほど前から祭りの行列の一部である奴振に、他地区である門前西小学校の子どもたちに参加してもらおうようにした。以前の天領祭では、黒島の子どもたちが祭り本番に備え8月の始めころから、奴振の練習を始めたというが、現在では祭りの4~5日前になってから奴振実行委員の指導のもと練習が行われるようである。練習時間が少ないため、昔と比べて奴振の動き(奴振独特の

歩きかた) がぎこちなくなると感じる人もいる。また現在では、男の子の役目であった奴振に女の子も参加するようになった。他にも昔からタブーとして女性は曳山に触ることはできなかったが、現在の天領祭では曳山の上に女の子の乗ることができるようになった。子どもの数が少なくなってしまった今の黒島で天領祭を続けるためには、女性の参加が不可欠となっているのである。

そしてまた、以前は行われていた祭りの前の曳山の組み立てや、後の解体も高齢化に伴い行われなくなった。現在の曳山は組みあがった状態で資料館に保存されている。毎年、黒島のたくましい男たちの手による曳山の組み立て・解体がなくなったことは祭りの重要なワンシーンが失われてしまったように感じるが、これによって、曳山の傷みが少なくなったということもあるようである。

天領祭について詳しくお話を聞かせていただいた M さん (70 歳代・男性) は、「祭りのやり方を変えていかなければ、10 年後には祭りは消えてしまう。今後も曳山を 1 台にしたり、2 日間を 1 日のみにしたり、という工夫が必要だろう。」と今後の天領祭の存続を不安視していた。

また、K さん (70 歳代・男性) も「あと何年祭りが続けられるだろう。」と同様の思いをお持ちで、

- ・祭りを 17・18 日ではなく、土日によらず。
- ・奴振をなくす。
- ・旗持ちの人数を減らす。

などの対策を考えているという。

また K さんは、祭りの参加者の意識の変化も指摘していた。「昔は、祭りは義務のようなであった。黒島にいた多くの船乗りはなるべく、祭りの時期に合わせて休みをとり祭りに参加していた。あばれ獅子に入りたがるなど祭りへの参加には意欲的であった。しかし現在、黒島に帰ってきてもお客様気分で見物しているだけの若者が増え、また、12、13 日のお盆の時期に黒島に帰省し、祭りを待たずに戻ってってしまう者も多い。」という。

4. 考察

前節で述べた黒島地域での天領祭の変化は、他の過疎地域の祭りにおいても同様に起きている。K さんの話では、黒島の周辺地域である鹿磯や浦上ではすでに、夏祭りの日にちを 1 日に減らしてしまっているという。少子高齢化が進む限り、それらの地域の祭りの存続は難しくなっていくだろう。黒島の天領祭も、奴振の人数確保や諸費用など、住民の負担は大きくなるばかりである。M さんが「祭りはあってもなくてもいいもの」と言うように、「祭り」の期間は日常生活とは異なる

った非日常の期間であるため、祭りの存在は人びとの生活に直接には影響はないと思われる。

しかしながら、祭りを開催することが難しくなってきた今も、黒島住民は祭りを存続させるために工夫を続けている。ここでは、黒島の人たちにとって、天領祭とはどんな存在であるのかについて考えを深めていきたい。

黒島の住民は、季節の移ろいを天領祭に通じて感じている。黒島では、天領祭の期間がお盆の後であるため、盆にはお墓参りのみをし、盆踊りなどの行事は、天領祭期間中に行われている。お話を聞かせて頂いた M さん（70 歳代・男性）は、「祭りの間は、黒島住民は皆祭りに集中する。祭りに終わったときには、疲労感と季節が変わったような気分が残る。」と話してくれた。天領祭は住民にとっての夏、季節の区切り目であり、天領祭の終了は夏の終わりを表すようなものなのである。

また、M さんは、「祭りが近づいてくると楽しい気分になり、行列を見るのが毎年楽しみだ。」という。

また、N さん（60 歳代・女性）は、「天領祭が終わると涙が出るほどさびしい」と話していた。

このように、天領祭りは、黒島の住民の思い出の大部分を占めている。第 1 項でも述べたとおり、天領祭の思い出を話すときは、黒島の住民の方たちは皆、笑顔だった

天領祭の期間は普段静かな町である黒島が、にわかに活気づく。この時期は、祭りのために黒島の住民皆が顔を合わせ、また黒島を離れ金沢市などに移り住んだ人たちもふるさとに戻ってくる。黒島の人口が普段の倍以上になることもあったという。女性はここぞとばかりに美しく着飾り、男性は、山廻しなど見事に曳山を操り男気に溢れる。祭りは、黒島の空気を変えるものであり、黒島の人びとにとって大きな行事である。

住民ひとりひとりに役割が与えられる天領祭は、住民と住民とを繋げる役割を担っているといえる。

過疎が進む地域で重要となってくるものは、住民間のつながりである。能登半島地震の被害が最小限に抑えられたのも、住民間の協力が大きな役割を果たした。天領祭など年中行事を維持していくことは、このつながりをより強固なものにしていくことに繋がる。少子高齢化の影響を強く受ける黒島の住民は、天領祭を、「あるのが当たり前だった」天領祭から「なくてはならないもの、維持しなくてはいけない」天領祭としてとらえ直しているのではないだろうかと思う。そして、祭りを維持していくことにもまた、住民間のつながりが不可欠であることは言うまでもない。

5. おわりに

人とのつながりが深くなっていくことに大きな喜びを感じた調査実習であった。

黒島の方の温かさに多く触れることができた。私の拙い質問にも、真剣に耳を傾けてくれ、お別れのときも笑顔で見送ってくださった住民の方の優しさが私の宝物となった。厚くお礼申し上げたいと思います。

研究室の仲間とも海を見ながら多くの時間を共に過ごし、特別な夏の思い出を作ることができたと思う。先生方とも、普段以上にお話をする機会があり、報告書作成においてはアドバイスを多くいただいた。お力添えに感謝しています。

報告書として、至らない点は多くあると思うが、多くの方の祭りに対する思いを形に残すことができたことをうれしく思う。